

〈資料〉

2018年度教職相談活動報告

片山敬子

はじめに

新学習指導要領の周知徹底期間を経て、本年度より幼稚園教育要領は全面实施となり、小学校においては2020年度より、中学校においては2021年度より全面实施を迎える。高等学校においては、2022年度より年次進行により実施を行い、特別支援学校においても、幼稚部・小学部・中学部及び高等部について各該当の校種に準じた取扱いとなる。つまり、本年度から小学校（小学部を含む）及び中学校（中学部を含む）については、移行期間に入っている。その状況下で行われた今年度の教員採用試験は、新学習指導要領を試験に組み込むものが多い中、一方で現行の学習指導要領を問うものが存在するなど、教員採用試験を受験する学生にとっては、若干混迷を極めるものとなった。

1 相談概要

相談内容は、前半は4年生、大学院生、課目等履修生については教員採用試験への対策や準備の仕方、実技試験や面接試験への攻略方法等についての相談がほとんどであった。3年生は、教員採用試験の準備についての質問であった。2年生は、教職課目の履修についての相談であった。後半になると、予想通り4年生の相談件数は激減した。本来ならここからは3年生の出番と考えていたが、そういう動きには至らなかった。

学生が学校現場に直接関わる機会は、教育実習において他になく、本センターが主催する「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト事業において現職教員から学ぶ姿を見たり、丁寧に書かれた感想用紙に目を通したりする中で、教職に関して多くの刺激を得ていることは確かであるが、受講する学生の姿勢として自らが教師を目指しているかどうかにより、学びの広さや深さに大きな違いがあるように感じている。

2 教員採用試験に向けての取り組み

教員採用試験への取り組みについては、地域学部の学生が9割以上を占める中、受験する学生で複数受験を希望する割合は女子学生の方が高い傾向にあった。受験地により教員採用試験の内容が異なり、面接重視の傾向に加えて学習指導案作成や指導案に沿った模擬授業を課すなど実践力や対応力を求める場面設定が増加しつつあるように感じた。個人での面接指導を望む声が多く、教職相談を含めて1人原則1時間と定めていたの、効率の面では課題を残したが、一人一人のニーズにじっくりと向き合うことができた。

また、筆記試験以上に面接試験対策に苦慮する様子が見られたので、「自己振り返りシート」「教育実習振り返りシート」「教員採用試験振り返りシート」を作成し、折々に自分を見つめ直す機会として活用した。教員採用試験に臨む前に「自己振り返りシート」で、自分の性格（長所・短所、強み・弱み）、教員への適性、教員を志すきっかけ、目指す教師像、そのために努力していること、最後に自己PRをまとめさせ、冷静に自らを客観視し、現時点での自分の目指す教師像とのギャップを考えさせた。

加えて、各県市の採用担当者の説明を学生と共に聞き、その出題傾向などについて先輩からの情報や専門誌などを参考にした。必要と判断される資料については配布を行い、情報提供を行った。新学習指導要領を中心に、学校現場で問題となっている現状など、具体例を示しながらその対応や状況判断を求めた。

3 外部指導者による教員採用試験面接指導

面接指導については、個人面接の指導は教職相談の中でも行い、模擬授業についても複数の学生を集めて、お互いに模擬授業を見合う場面も作ったが、外部から学校現場での豊富な教職経験のある現職校長・退職校長に指導を依頼することで、学校現場や教育行政の空気や意識に触れながら、学生自らが教員の仕事に対する理解を深めるとともに、教員としての心構え、意欲、使命感等を高めるために大変有意義な機会となった。

従来の指導形態としては、個人面接・集団討議という組み合わせで、最後に講師の先生方からご指導をいただくという内容であったが、近年個人面接・集団面接、集団討議に加え、模擬授業、場面指導、口頭試問、ロールプレイ、グループワーク等形態が多様化し、即戦力となる柔軟かつ適切な対応力が求められたり、集団を意識した中での発言態度や即座に協力関係の構築を求められたりするなど、全国的に教員採用試験倍率が低下する中、より優秀な教員の人材確保に向けて、採用試験の工夫改善が急速に図られている。

そこで、今年度については、第1回は個人面接・集団面接、第2回は個人面接・模擬授業という二つのパターンで行った。第1回は、面接指導のオーソドックスなやり方である。入室から退室までの立ち居振る舞い、視線を与える印象、表情、動作、話し方等々、「採用」という目的を持ってその場に臨む試験官が何を見、何を重視するのか、求められているものは何なのかなど臨場して初めて実感するものも少なくない。第2回は、集団討議に代えて模擬授業を入れてみた。全員が模擬授業をする時間は確保できなかったものの、各グループごとに他の学生の意見を聞きながら、自分が考えた対処法の浅さや考え方の狭さに行き着く場面も見られた。「経験を通して学ぶ」とは、当たり前のことではあるが、参加した学生の収穫の多寡はともかく、経験したことと得られた自分への気づきは今後多くの改善につながるものと期待したい。

4 成果と課題

- 教職相談室で多くの学生と話をしながら、結局のところ教職の適性は「人と関わり、人に学べるか」が基本である。その巧みさは人によって異なるが、表面だけ上手く立ち回ればよいというものではない。心が伴っていなければ本物ではない。それは、子ども達でさえ鋭く見抜く目を持っている。今年度、教員採用試験に向けての第一歩の取り組みは「自己振り返りシート」であった。簡単に書けるものと予想していたが、意外にも困難を極める学生が多かった。面接指導にも役立ち、学生にとっても自分の考え方の根幹として活用できた。また、外部講師による指導については、現職教員等の教師としての姿勢や実践に向けた工夫、課題解決へのアプローチなど、各先生方の持ち味や生き方が伝わり、教職に就かない学生にとっても、教職という枠にとらわれない幅広い内容が心に響いたようだった。
- 教職を将来の自分の職と考えるのか、単に選択肢の一つと考えるのか、先ずそこに大きな違いがある。教員免許を取得するにしても、そこで得られる教職に対する見方、考え方、そして捉え方が全く異なってしまう。学生を見ていると、1年生で教職科目を取得しながらも、その決断は先送りされているように感じられる。もし、そうであるなら、「教職をめざす」と決めた学生から、教職への準備を始めても決して早過ぎることはないと思う。なぜなら、理論のみならず実践や経験を通して学んだことを検証しながら着実な自分の力を醸成していくには時間が必要だからである。今年度春から教員採用試験にどう挑むのか考え続けてきたが、合格という通過点のみに力を注ぐのではなく、合格通知をもらい、採用辞令を交付された時に、教員として教育に携わることができることへの感謝と誇りと使命感を強く心に刻み、子ども達に学び、成長し続けられる人として教員採用辞令交付式に臨める学生を育てたい。

片山敬子（鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構教員養成センター）